

## 書評

# Keynes: The Return of the Master

(Robert Skidelsky 著 Public Affairs 社刊 2009年 221 + xviii)

大瀧 雅之

## 1. はじめに

著者の Robert Skidelsky 教授は、世界的に著名な Keynes 研究者である。現在は英国学士院会員で Warwick 大学の政治経済学名誉教授でもある。これまでも 'John Maynard Keynes: Hopes Betrayed 1883-1920 (1983)', 'John Maynard Keynes: The Economist as Savior 1920-1937 (1992)', 'John Maynard Keynes: Fighting for Britain 1837-1946 (2000)' という、いずれも大部の三部作の伝記を書かれており、2003年にはその縮刷版である John Maynard Keynes 1883-1946: Economist, Philosopher, Statesman を上梓されている。

本書はそれらの緻密で膨大な研究の要約であると同時に、The Return of the Master の副題から明らかなように、Skidelsky 教授が理解するところの Keynes 経済学的立場に基づいて、危機にある世界経済への処方箋を提示するという、誠に魅力的な構成となっている。流麗な英文とともに短編であることもあり、筆者は一気に楽しく読み進むことが出来た。

初学者が取り組むにはやや文章が難しいが、従来ほとんどの「教科書」で語られる「ケインズ」と実際のバランスがとれた現実的な理論経済学者 Keynes が、どれほど開きがあるかを知る上でも、本書が日本でも広く読まれることを強く期待したい。本書以上の情報を得たいと思えば、Macmillan から出ている全 26 巻の Collecting Writings に直接当たるしかないが、これは理論経済学の素人には到底叶わぬことである。その意味でも本書の刊行は極めて意義深い。

## 2. 本書の構成と内容

### 第 1 部 The Crisis

本書は三部構成をとっている。第 1 部の The Crisis では、正統的な Keynes 理解に基づき、危機にある現代世界経済の病理解剖と現状分析が実に手際よくなされている。経済史家も世界一流となるとその分析は、並のマクロ理論学者の遠く及ぶところではない。

第 1 部の第 1 章 What went wrong? と第 2 章 The Present State of Economics では金融工学と new Keynesian を含めた現代マクロ理論に対する批判がなされ、特に Merton-Black-Scholes らの金融工学が LTC 危機とリーマンショック以降の世界経済の停滞の元凶となったと指摘する。

さらに new Keynesian を柱とした不況脱出策のアイデアが教科書的で事態に即応していないこと、すなわち、①金融機関からの不良債権買取（日本でも実質的には実行されていることに強く注意を喚起したい）が全く実効性を持っていないこと、②財政の無定見な拡大が国債の累増による予算自由度の著しい低下に繋がる危険が高いことを、丹念にデータを拾って説得的に展開している。

なおアメリカのスウェーデンを模した不良債権買取政策を、スウェーデンのそれは実物資産の裏付けがあったのに対し、アメリカの裏付けは「金融のごみ」(financial garbage) であり危険極まりないと、実に冷静である。要するに Skidelsky 教授は、マクロ経済学者は何をしているのかと叱咤しているわけである。

加えて、派生証券、特にたった一度きりの出

来事である, catastrophic risk, regulation risk, legal risk, political risk に対する「保険証券」が, 繰り返し現象の膨大なデータの集積と改訂を元にした生命保険と同じ計算法を用いて販売されているという, きわめて危険な事実が鋭く指摘されている. von Mises (1957) は確率論の名著であるが, そこでも本来確率論は多数の繰り返し試行を分析する手段であると明確に主張されており, 教授の経済理論・確率論に対する理解の深さが窺われる.

しかし一方, 大恐慌以降の世紀の不況では, 12 四半期も連続でマイナス成長であったことを鑑みれば, Lehman ショックにより世界がそこまで深刻化する可能性は極めて低いとする. そしてその根拠は, 国際協調体制の深化と Keynes の出現により経済学自身が飛躍的に進歩したことに求められる. 後述するが, 不安を煽ることで利益を得ようという経済学者・金融機関関係者が溢れる今日, 落ち着いて物事を見定めようという教授の姿勢は, 厳しいアカデミックな訓練を受けたものにしか為しえない業である.

## 第2部 The Rise and Fall of Keynesian Economics

第2部は, Keynes 自身の経済学そしてその後のアメリカンケインジアンに関する学説史が展開され, 第3部の第6, 7章と並び, 本書の核心をなす. 第3章 The lives of Keynes では, Keynes の生涯が特に彼自身の資産運用との関連を強調して, 一気に描かれている. まさに碩学の一筆書きである. 期待の要因が Keynes によって初めて体系的に経済学に取り込まれて行く様子は, 彼自身の資産の激しい浮き沈みと相俟って読むものを飽きさせない.

すなわち Keynes は, 自らの経験を一般化させることで革新的な理論を作り出したのである. 自然科学者からは一笑に付されそうな pseudo-mathematics で構築された空中楼阁を彷徨する理論経済学者が多い中, 経験科学としての経済学のあるべき姿がここにある. また, 現在ではもはや高く評価されない Schumpeter

や Robertson の的外れな批判に, 当時の人間模様を見るのも一興であろう. そして幾多の投機の大波をくぐった Keynes が最後に辿り着いた「究極」の投資法が, 'faith' すなわち目先の動きに囚われない長期的視野からの株式投資であるというのは, やはり Keynes と雖も人の子と知って, 胸を撫で下ろすのもまた楽しい.

第4章 Keynes's Economics では, Keynes 理論の最大の特徴が「不完全雇用均衡」(underemployment equilibrium) にあることが, 諸方面から解説される. 教授が主張する Keynes's Economics が new Keynesian をはじめとする, アメリカンケインジアンと峻別されるのは, まさにこの点にある. つまり現代の「自称」Keynesian は, 新古典派の定常均衡の周りでのわずかな変動として, 皮肉に言えば誤差の範囲の確率的変動として, Keynes 経済学を捕らえている. これに対して Keynes (1936) を一読していれば直ちに明らかだが, 教授の説くように Keynes は不完全雇用均衡こそが, 市場経済の常態と捕らえていたのである. 現在のマクロ経済学がいかに墮落しているかは, ここからも看取できる.

本書が主張するように, Keynes にとっての貨幣とは「価値保蔵手段」(store of value) であり, 彼自身の言葉を借りれば, それこそが 'a subtle device for linking the present and the future' なのである. こうした貨幣の役割が, それ自身への「信頼」(credibility) と相俟って価格・賃金の「安定性」(stability) を生むのだが, 本書では貨幣の存在及び期待と諸価格の安定性の関連が, 残念ながら今ひとつ不分明である<sup>1)</sup>. 第6章に Love of Money という節があ

1) ここで言うところの「安定性」(stability) とは, new Keynesian の唱える「粘着性」(stickiness) とは, 次の意味で異なる. すなわち「粘着性」は価格改定費用や改定機会の制約を前提として価格の名目貨幣供給量に対する不感応性を捻り出している. これに対し「安定性」は, 物価水準の合理的期待の名目貨幣供給量の変化に対する不感応, 言い換えれば, 貨幣価値に対する「信頼」を前提として, 内生的に導出される概念である.

るだけに、なんとも惜しまれる<sup>2)</sup>。

しかしながら、Keynes が均衡という分析ツールを捨てたわけではなく、均衡自身が期待のあり方に依存する 'bootstrap equilibria' (本書の命名による) を想定していたという指摘は正鵠を得ている。これこそがまさに、アメリカンケインジアン (J. Robinson によれば bastard Keynesian) に欠落していた視点なのである。

さらに Keynes の *Treatises on Probability* に依拠しながら、計量経済学に極めて批判的であったことも詳述されており、今日のマクロ経済学の実態をみたら Keynes がどれほど嘆くかは、どんな読者も容易に想像できよう。ちなみに Keynes は、1938年7月16日の Harrod 宛の書簡で Tinbergen の著書に触れ<sup>3)</sup>、次のように述べている。すなわち、

The pseudo-analogy with the physical science leads directly counter to the habit of mind which is most important for an economist proper to acquire. I also want to emphasise strongly the point about economics being a moral science. I mentioned before that it deals with introspection and with value. である。

第5章 The Keynesian Revolution: Success or Failure は、Keynes 以降のマクロ経済理論とその実体経済への影響がコンパクトにまとめられており、初学者や他分野の研究者でマクロ経済学に関心がある人達には、格好の情報源となるであろう。もはや何も語らぬ人となった Keynes がいかに政治的に (特に減税政策を巡って) 利用されてきたかという記述は、Buchanan and Wagner (1977) などを「ネタ本」にした「俗書」の洪水に憤りを感じずのものにとって、溜飲を下げる思いがある。

しかしながら、本書は Stiglitz 教授や

Krugman 教授のエッセイおよび new Keynesian なる「学閥」に対しては評価が若干甘い<sup>4)</sup>。これらの二人のノーベル賞受賞者の専攻は (また賞の選考理由も)、いずれも応用ミクロ経済学であり、マクロ経済に関する発言は、深い理論的考察と十分な現実認識・データを駆使したものとは言い難い。すなわち観念的で肌理の粗いものが多いと同時に、アメリカの世界戦略に重きを置いた政治色が極めて強い。

また教授は、M. Friedman の自然失業率仮説に極めて批判的であるが、長期の古典派均衡の周りの「揺らぎ」として景気循環を捕らえるのは、上述したように new Keynesian も同じである。違いは期待の調整 (monetarism) あるいは価格の調整 (new Keynesian) のどちらに摩擦を求めるかだけである。これらの点は、一般読者が本章を読むに当たって、強く意識すべきである。

### 第3部 The Return of Keynes

ここでは、前二部を受けて Keynes の思想に基づき、これからの資本主義のあるべき姿が、経済倫理、政治哲学、そして具体的なマクロ政策の三面から語られている。

なかでも第6章 Keynes and the Ethics of Capitalism と第7章 Keynes's Politics は、本書の白眉である。「教科書」と論文だけで経済学を学んできた者には全く無縁の Moore (1902) や Burke (1790) が登場し、その著が如何に Keynes の人生・経済観に大きな影響を与えたかが詳述されている。

Keynes と言えば「山っ気」たっぷりの投機家という、きわめて俗で偏向した情報しか持たない者にとっては、さぞや驚天動地であろう。ただ留意して欲しいのは、Keynes とて無倫聖

2) 貨幣を価値保蔵手段とするミクロ動学理論で、諸価格が貨幣数量の変化に対して、不感応となり貨幣が非中立的となりうることは、既に Otaki (2007, 2010) で厳密に証明されている。

3) Keynes (1973, P.300) を参照されたい。

4) Krugman 教授の発言がいかに場当たりのものであるかは、例えば、Krugman (1994) のアジア経済の将来予測と現実のそれがどれほど乖離していたかを見れば、明らかである。また後に紹介するように、Skidelsky 教授は経済の globalization について懐疑的であるが、これは Stiglitz 教授の多数の著作 (例えば Stiglitz (2006)) とは正反対の立場にある。

人ではなく、自らも Keynes (1949) で淡々と自己省察しているように、ある種の「背徳者」としての側面もあるのである。このことは本章でもさりげなく、最後の節である Keynes and Christianity で語られている。

さて第6章に登場する Moore (1902) は百余年を超えて、現代に鋭く語りかけてくる古典である<sup>5)</sup>。この本の主旨は「善とは何か」(What is good?) に集約される。そして hedonism や metaphysics が「善」そのものに階級を付けていることに対して、徹底した批判を加える。すなわちそうしたものが予め存在するなら、新しく生まれたわれわれは何を「善」として付け加えることが出来ようかという、遍き人間肯定の姿勢からの鋭い批判である。そして「善」とは時代・場所・関係などに応じて定義されるものであって、一概に定義することは出来ないとの結論に至るのである<sup>6)</sup>。

本章ではそうした Moore の理論を前提に、ケインズの資本主義観が語られる。すなわち資本主義は人々がゆとりと節度のある(いかなるときに何が「善」であるかを考え、その達成の

術を考え実行する余裕のある)生活が出来るようになるための過程であり、それ自身が「善」ではないというのが、ケインズの価値観である。そして usury と avarice (高利貸しと強欲者) が許されるのは、それまでの期限付きの話であると意気軒昂である。しかしながら、第3節 Love of Money で詳述されるように、「富める」人々の大半の金銭欲に限りがない現状には、常識人なら誰もが暗澹たる思いに陥らざるを得ない。Skidelsky 教授も、'How to nourish the fading) 'associations or duties' so essential for human flourishing is the unsolved problem of the developed world today.' と述べている。

ただ本章の末尾で、人々の金銭欲の限界効用が増加すること、Keynes は気付かなかつたとしているが、これは必ずしも正鵠を得ていない。すなわち、本章にも引用されている Keynes (1930) には、次のような記述があることに読者は留意されたい。すなわち、

'Yet there is no country and no people, I think, who can look forward to the age of leisure and of abundance without dread. For we have been trained too long to strive and not to enjoy. It is a fearful problem for the ordinary person, with no special talents, to occupy himself, especially if he no longer has roots in the soil or in custom or in the beloved conventions of a traditional society. To judge from the behaviour and the achievement of the wealthy class today in any quarter of the world, the outlook is very depressing!'

である。この文章が21世紀に書かれたものと云っても、予備知識のない者は全く気付かぬであろう。

第7章 Keynes's Politics は、Keynes の精神生活を支えるもう一つの古典 Burke (1790) に依拠して議論が展開される。liberalist かつ realist の Keynes の面目躍如である。Burke (1790) は、Burke がパリに住むある紳士にあてた書簡という形式をとりながら激しい調子を秘めた政治哲学の古典である。フランス革命の単一の「理念」によって国を治めようとした試

5) Keynes (1930) は、Moore (1902) に触れ、次のような複雑な思いを語っている。すなわち、

'I went up to Cambridge at Michaelmas 1902, and Moore's Principia Ethica came out at the end of my first year. I have never heard of the present generation having read it. But, of course, its effect on us, and talk which preceded and followed it, dominated, and perhaps still dominate, everything else.'

である。

6) Moore (1902) の結論部分である The Ideal には、次のような極めて明晰な記述がある。すなわち、'This new case only differs from the former in this, that, whereas the true belief, by itself, has quite as little value as either of the two other constituent taken singly, yet they, taken together, seem to form a whole of very great value, whereas this is not the case with the two wholes which might be formed by adding the true belief to either of the others.' ここから Moore が「善」を個人的な存在としてばかりではなく、社会的存在として如何に深く認識していたかを窺い知ることが出来よう。

みは、単に血と食物に飢えた mob を喜ばせただけで、その他大多数の国民に果てしない災厄をもたらしただけであると、強く主張する。

確かに Skidelsky 教授の主張するように、既存の所得分配を尊重しすぎる面もあるかも知れないが、この名著には、たとえば次のような感動的な文章が綴られている。すなわち、  
'but a good patriot and a true politician, always considers how he shall make the most of existing materials of his country. A disposition to preserve, and an ability to improve, taken together, would be my standard of a statesman. Everything else is vulgar in the conception, perilous in the execution.'

これはアメリカの世界戦略である globalization とは、明らかに背馳する主張である。また、  
'By a slow but well-sustained progress, the effect of each step is watched; the good or ill success of the first gives light to us in the second; and so, from light to light, we are conducted with safety through the whole series.'

という。この文章は明らかに未知の将来に対して、着実な進歩の必要性を唱えている。

よって筆者は、Burke を「保守主義者」と単純にラベリングすることには与しない。むしろこれらの文章から浮かび上がってくるのは、Moore (1902) と同様に、生きとして生きるあらゆるものへの肯定の姿勢なのではなからうか。実際再び Burke (1790) を引用すれば、

'Humanity, and perhaps policy, might better justify me in the one than in the other. It is a subject on which I have often reflected, and never reflected without feeling from it.'

である。Keynes はこうした知的風土に育ったわけである。Skidelsky 教授が指摘するように、まさに 'He was the philosopher of an embattled, not triumphant, liberalism.' なのである。

Keynes のこうした政治哲学実践のための原則として、本書では、「真実を語ること」と「個人に合理的判断が可能であると信ずること」が挙げられている。このような政治的態

度は Keynes (1919) を読めば直ちに明らかだが、Skidelsky 教授によれば、これは Keynes が虚偽や自己欺瞞を許さないことが知的階級の義務であると考えていたことを意味する。

余談だが、統計データを無視した「デフレ・不況論」が、中央銀行まで巻き込んで鳴り止まない、とある国の知識階層（もしそれが存在するならば）は一体何をしているのだろうか。そうした人達には少なくとも、Keynes の名を語ることは控えて欲しいと、憤るのは筆者だけではなからう。

しかし Burke の愛読者であった Keynes が急進的であるはずもなく、本書でも、'In espousing the claims of reason, he was always conscious of how limited was its scope to penetrate the future.' と語られている。されど Moore (1902) をこよなく愛した彼が頑迷であるはずもなく、返す刀で Burke (1790) を批判して、'It was the absolutist of contract who are the parents of Revolution.' と述べている。これは Skidelsky 教授ならずとも、激賞すべき慧眼である。われわれ現代社会に住むものは、absolutists of contract が absolutists of market とほぼ同義であることに、憂いを以って心すべきである。

第8章 Keynes for Today は、Keynes 研究の大家である Skidelsky 教授が自らの研究成果をもとに、今後の世界経済および経済学教育のあり方を論ずる、本書の結尾である。まず、'We need a new thesis, in which government is accepted as non benevolent, but the market is not thereby totally rehabilitated.' という厳しい現状認識が始まる。これはアメリカに限ったことではなく、non-benevolent government は、日本でも「失われた10年」（一体何がと筆者は声に大にして聞きたいところだが）、「構造改革」、「株主主権」、といった「強面」三点セットが出揃った今世紀初頭あたりから、無論現在の民主党政権に至るまでの、一連の政策の流れとなって現れていることには、読者も留意されたい。

同じく 'One consequence of new paradigm

was that access to credit replaced the welfare state as the basis of the social contract.' というさらに厳しい見解を述べる。すなわち、さきほどの Keynes の Burke への批判がそのまま当てはまるような世の中になってしまっているのである。

教授はこうした世界経済の反動的な潮流の原因を、「貯蓄の洪水」(The Saving Glut)と「行き過ぎた Globalization」に求める。まず筆者も意を同じくする過剰な Globalization の問題について論じよう。Keynes が対外直接投資に極めて批判的であったことを論じ (Keynes の最初の勤務先がインド省であることに留意されたい)、次のよう極めて示唆的な文章を引用する。すなわち、'The protection of a country's existing foreign interest, the capture of new markets, the progress of economic imperialism — these are scarcely avoidable part of a scheme of things which aims at the maximum of international specialization and at the maximum geographical diffusion of capital whenever its seat of ownership.'

である。すなわち資本移動の自由化は、自国権益の保護、新市場獲得の必要性、経済的帝国主義の深化を招き、必ずや国際的な対立や固有文化の破壊を召致することを、Keynes は既に経験から予想していたわけである。

これこそまさに 21 世紀初頭に生きるわれわれが、直面している問題そのものではないか。IMF や World Bank の引いた設計図に載って、どこもが同じような工業国となったとき、地球は果たして人間の生存を許してくれるだろうか。また Keynes-Skidelsky の議論で見落とされている点がある。すなわち他国における雇用の創出は、自国への失業の輸入となる可能性が極めて大であることである。こうしたことが政策論議に全く上がらないことから、現政府が benevolent な存在でないことは明らかであろう。

次に、「貯蓄の洪水」の問題について論じよう。教授は東アジアの貯蓄超過とアメリカの消費過剰が問題であるとしている。確かにそのと

おりだが、筆者の意見ではこの問題については、アメリカの責任が極めて重い。つまり教授は全世界のドル準備が 2003 年から 2009 年にかけて、26 兆ドルから 77 兆ドルに膨張したために、投機の芽を摘むことが出来ないとしている。

すなわち FRB の不良債権の大量買取で、市場に想像を絶するほど、ドルが「散布」されたのが、明らかにこの結果を呼んでいる。すなわち「貯蓄の洪水」というよりも、基軸通貨国としての責任を果たしていないことが、大問題なのである。たとえ世界経済が多少停滞しようとも、投機を清算させその新たな芽を摘むためには、世界全体での協調利上げが必要なことは、以上から火を見るより明らかである。この点はやはりマクロ理論が専攻でないことから、分析力の弱さであろう。

最後に Skidelsky 教授は、長期的には経済学の体系自身を見直すことが、「超金融緩和」、際限のない Globalization の流れを押しとどめることに繋がると考え、具体案を出している。

筆者もミクロとマクロを分離すべきであるという提案には賛成できないが、他の点では教えられるところが多かった。

すなわち、学部学生にはマクロミクロの基礎理論のほかに、政治経済史、経済思想史なども広く学ばせ、moral science としての経済学の基礎を作る。そして大学院では、マクロ経済学はミクロとは別に、歴史学、哲学、社会学、政治学、国際関係論、生物学そして文化人類学も学ぶべきだとする。

確かに教授の 'A broadly based postgraduate course in macroeconomics would study not just the implication of particular policies for economic stability, growth and development, but also their social and moral implications.' という指摘は、現在のマクロ経済学の「惨状」を見るにつけても、首肯すべきものである。しかしながら、マクロ経済学はミクロ経済学とは本来一体であるべきと、筆者は考える。

本来不要な部分でも「数学」乱用には目を覆いたくなるし、数学が出来ると良い経済学者であるという風潮は、確かに忌むべきである。だ

が経済学が本来一体であるべきと考え、それにあったカリキュラムを作ることこそ、教師・大学院生の中の風通しを良くし活発な議論を喚起するという意味では、現実的で望ましいのではなかろうか。

### 3. 技法としての「合理的期待仮説」

Skidelsky 教授は、本書を通じて、この年代の著名な研究者と同様、「合理的期待仮説」をナンセンスなものとして、頭から退けられている。確かに現実的には全く「非合理」な仮説であることは間違いない。しかし逆から言えば、Keynes (1936) をもって期待の重要性に関する研究は、実質的に終わりを告げているのではないだろうか。期待で経済が動くことはいまや経済に携わるものの常識に近い。つまり教授が命名した 'bootstrap equilibria'こそが現実の世界であるにあるというのは、少なくとも実務的には広範に認識されている。

実際、資産価格の予想形成を如何に操作すると自らが得できるかが、世界のほとんどの機関投資家の関心事である。評者もその存在に極めて批判的だが、Merton-Black-Scholes らの金融工学は、予測というより、顧客に「夢」を刷り込む（期待を操作する）道具・材料となっているのではなかろうか。

もし金融工学に基づく経済計算が「合理的期待形成」あるいは「効率的市場仮説」(Efficient Market Hypothesis) をみたすならば、到底 LTC 問題や Lehman ショックは生起しなかったろう。すなわち「合理的期待仮説」自身が問題なのではなく、金融工学の pseudo-economics に何らかの客観性があると考えることが、そもそも大変剣呑なのである。

技術的に言えば、上述したように合理的期待形成と価格の伸縮性を仮定しても、bootstrap equilibria (複数であることが重要) の非常に自然な均衡の一つとして、Keynes 理論を蘇らせることは可能である。つまりこうした場合、理論への合理的期待仮説の導入は、期待の錯誤という要素を理論から取り除く一つの技法であ

る。そしてそれは、「貨幣錯覚」(money illusion) がなくとも、貨幣が非中立的になることを示すためには、不可避な手段なのである。

だがこのことは、期待の変動が経済に深刻な影響を否定するわけでは決してない。つまり合理的期待を前提としても、その変化自身によって予測通りに均衡が移動することがある。この現象は一般に、「自己実現的期待」(self-fulfilling prophecy) と呼ばれている。「自己実現的期待」は不換紙幣のように、それ自身が効用を生み出さないという意味で本来無価値なものが、みな価値があると思えば「固有の価値」(intrinsic value) が生じ、ないと思えば消失しハイパーインフレーションが発生する様、すなわち貨幣の「信頼性」(credibility) の変化を数理的に定式化するためには、大変有用な概念なのである。

#### 参考文献

- J.M. Buchanan and R.E. Wagner (1977). *Democracy in Deficit: The Political Legacy of Lord Keynes*. Academic Press, N.Y., U.S.
- E. Burke (1790). *Reflection on the Revolution in France*. Prometheus Books, N.Y., U.S.
- J.M. Keynes (1919). *The Economic Consequences of the Peace*. Macmillan, London, U.K.
- J.M. Keynes (1930). Economic Possibilities for Our Grandchildren. In *Essays in Persuasion*, Macmillan, London, U.K.
- J.M. Keynes (1936). *The General Theory of Employment, Interest and Money*. Macmillan, London, U.K.
- J.M. Keynes (1930). 'My Early Briefs'. In *Essays in Biography*, Macmillan, London, U.K.
- J.M. Keynes (1973). *The General Theory and After: Part II - Defence and Development*. Macmillan, London, U.K.
- P. Krugman (1994). The Myth of Asia's Miracles. *Foreign Affairs*. 62-78.
- R. von Mises (1957). *Probability, Statistics and Truth*. Dover Publications Inc. N.Y., U.S.
- G.E. Moore (1902). *Principia Ethica*. Cambridge University Press, Cambridge, U.K.
- M. Otaki (2007). The Dynamically Extended Keynesian Cross and the Welfare-Improving Fiscal Policy, *Economics Letters* 96: 23-29.

書 評

- M. Otaki (2010). A Pure Theory of Aggregate Price Determination, *DBJ Discussion Paper Series 0906*, Research Institute of Capital Formation, Development Bank of Japan.
- J.E. Stiglitz (2006). *Making Globalization Work*. Norton & Company Inc. N.Y., U.S.